研究主題

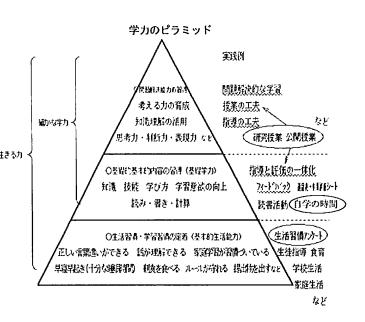
「確かな学力の定着と向上を目指す学習指導法の実践的研究」 副研究主題

~学習活動における指導の工夫と評価の実践を通して~

I 研究構想

「生きる力」を三層のピラミッドで考え 層的に学力を捉える。学習指導要領では、 知識・技能だけではなく、思考力・判断力 ・表現力などの資質や能力までを含めて確 かな学力と捉えている。基本的生活能力を もまるか しっかりと身に付けることが基礎的・基

本商内客心習得麼在基務晚的活龍率的第 三の層における思考力,判断力,表現力などの土台ともなるべき力と考える。



Ⅱ 主題設定の理由

学習指導要領の改訂により新教育課程への移行措置が行われている。これまで研究してきた教 科研究をさらに深め、より「確かな学力」を身に付けさせることが重要になってくる。そのため には、日々実践される教科指導を中心にした学習活動に研究の視点がおかれる。そこで研究主題 を「確かな学力の定着と向上を目指す学習指導法の実践的研究」として取り組んだ。

また副研究主題「学習活動における指導の工夫と評価の実践を通して」にある学習活動とは、 授業は勿論、それを土台として支える学級活動・部活動・学校生活・家庭生活などにも含まれる。 そのようなあらゆる学習活動の中で適切に指導・評価することにより、確かな学力や生きる力を つけさせられると考えた。

III 研究内容と方法

- 1 思考力・判断力・表現力・問題解決的な資質や能力の育成
- (1) 思考・判断・表現などが必要になる課題解決的な学習の推進
- (2) 自分自身の生活との関係で考えたり、表現したりする授業の工夫
- (3) 発表や話し合いなどにより、学びの質を高める指導の工夫
- 2 指導と評価の一体化を図り、フィードバックを充実させることによる基礎・基本の定着
- (1) 生徒の発言やつまずきの分析をもとにした適切な支援
- (2) 評価内容及び評価方法の改善
 - →1・2について「各教科の具体的な取り組み」を挙げ、研究授業・公開授業や日頃の 授業に生かしていく。

3 研究授業

研究内容 1・2 に関わり学校全体で2回実施。公開授業とは明確に役割を分け、学校としての「理想の授業」の追究や、教師の意識の共有化を目的として行う。また、指導主事を招聘して、レベルアップを図る。

4 公開授業

研究内容1・2に関わり普段行われている授業を公開し合う。全教師が年1回普段の授業を公開,他の教師の授業を空き時間に年2回以上参観する。負担軽減のため指導案や研究会は省略し、その代わりに簡単な報告書を参観者に書いてもらい授業者へフィードバックする。

5 生活習慣アンケート

生活習慣と学力の相関関係が表れた項目について,更に調査するとともに,その実態から 家庭と連携して生活習慣の改善に努める。アンケートはマークシート形式。結果について昨 年度のものと比較し検証する。

6 自学の時間

「基礎学力定着」と「主体的学習態度の育成」の2本柱とし、月曜日6校時帯を設定する。 「基礎学力の定着」は国語…漢字、数学…基本計算力、英語…単語・基本文の3教科。「主体 的学習態度の育成」は基礎学力が定着している生徒を中心に自分の課題に取り組む(教師は 質問に対応できる体制)。そのための各学年の内容に沿った「基礎学力診断検査」を実施する。

IV 成果と課題

1 成果

- ・各教科で、研究内容 1 「思考力・判断力・表現力…」研究内容 2 「指導と評価の一体化…」のそれぞれについて具体的な取り組みを挙げ、日々それを意識した工夫した授業が行われた。
- ・研究授業は、研究主題にせまる内容として全教員で参観し、全体でその指導法を共有し、 それぞれの授業を見直すよい機会となった。
- ・自学の時間は、今年度、初めての取り組みであったが、計画的な学習内容のもと実践されて、 国数英の基礎学力の定着に役立った。

2 課題

- ・研究授業(英語・理科)は時間を設定されていたので参観できたが、公開授業は忙しい中で 参観が難しく工夫が必要である。また、公開授業の実施についてもPTA授業参観や参観者 のある授業などを公開授業に充てるなどして負担軽減を図る必要がある。
- ・研究体制として,教科部会,学年部会を中心に行われてきたが,そこで話し合われた内容を 全体会で共有する機会を設ける必要がある。

V 成果物

研究授業 三枝洋介 教諭 2年4組 英語科 NEW HORIZON English Course2

「Unit5 A park or Parking Area Dialog」

萩原 修 教諭 1年5組 理科 第2章 物質のすがた 1節 物質の性質 「物質を密度で区別しよう」

自学の時間 全学年 月曜日6校時 年24回実施

生活習慣アンケート 今年度と昨年度, 同一学年で比較

(研究主任 奥山寿夫)